

アドラー心理学に基づくクラス会議に関する研究動向と 今後の展望

木下将志*・赤坂真二**
(令和元年9月5日受付；令和元年12月3日受理)

要 旨

本研究では、今後のアドラー心理学に基づくクラス会議研究の進展に示唆を与えることを目的とし、クラス会議に関する研究の成果と課題を整理した。その結果、クラス会議は、小学校中・高学年において、学級満足度の上昇と共同体感覚の育成に有効であるということが示唆された。今後の課題として、①質的研究および量的研究を統合して分析を行い、クラス会議の効果を詳細に明らかにすること、②他校種における実証的研究の積み重ねが必要であること、③クラス会議プログラムを継続的に実施することが求められている。

KEY WORDS

アドラー心理学 クラス会議 研究動向

1 問題と目的

1.1 研究の背景

平成29年度に告示された小学校・中学校学習指導要領には、「学習や生活の基盤として、教師と児童〈生徒〉との信頼関係及び児童〈生徒〉相互のよりよい人間関係を育てるため、日頃から学級経営の充実を図ること」が示された（〈〉は中学校¹⁾）。このことを受け、新学習指導要領小・中学校の解説特別活動編には、「学級活動における児童生徒の自発的・自治的な活動を中心として、各活動と学校行事を相互に関連付けながら、学級経営の充実を図ること」が示された²⁾。ここに示された学級活動における自発的・自治的な活動について、脇田（2019）は、「学級活動の活動形態である、i）話し合い活動、ii）係活動、iii）集会活動のことである」と述べている³⁾。近藤（2000）によれば、話し合い活動とは、「学級（ホームルーム）活動における中心的な活動であり」、その内容は、「学級や学校生活の充実と向上に関することについて、解決策を求めたり、日常生活や学習への適応及び安全に関すること等について情報交換をしたりすることなど、児童生徒の話し合いによって行われる」ことである⁴⁾。宮橋ら（2017）は、「新学習指導要領において、特別活動で求められる資質・能力は、話し合い活動によって形成される力が重視されている」と主張している⁵⁾。これらのことから、特別活動での学級活動における中心的な活動である、「話し合い活動」を基盤にした学級経営の充実を図ることが求められている。

学級経営の充実を図る一つの視点として、諸富（2000）は、学級経営に心理学を活用すべきであると主張し、数ある心理学の中で学級経営に役立つものとして、アドラー心理学を挙げている⁶⁾。また、会沢（2011）も、「学校で活かせるカウンセリングの代表選手」として、アドラー心理学を挙げ、その学校教育における効果を支持する⁷⁾。アドラー心理学では、学級経営において、学級の問題解決は、学級全員の援助的なかかわりから自然に起こってくるものとして、学級全員による話し合いの機会をもつことを重視している⁸⁾。その主な手法が、「クラス会議」である。クラス会議について、赤坂（2014a）は、「クラス会議を学級集団づくりに取り入れる動きが始まっている。まだ少数であるが、学級の枠を超え、学校全体の改善の中核的な方法論として位置づけられ、学校ぐるみで取り組まれる例もみられるようになった」と述べ、近年、国内でもクラス会議の教育効果に注目する主張が見られるようになったと述べている⁹⁾。また、多くの教師が実施できるように、クラス会議の手順を示した「クラス会議プログラム」（森重 2010¹⁰⁾、赤坂 2014b¹¹⁾など）が作成され、学校現場で実践している教員からも、クラス会議は期待される効果と実用性に大きな可能性を持つ取り組みであると逸話的報告（八長 2015¹²⁾、久下 2015¹³⁾など）がされている。

1.2 アドラー心理学とクラス会議

「クラス会議」とは、「共同体感覚」を重視するAdlerの理論を背景とした「話し合い活動」である。Adler, A

*上越教育大学（専門職学位課程） **学校教育学系

(1870-1937)が提唱したアドラー心理学は、個人心理学とも呼ばれ、民主的な親子関係や学級経営の必要性を主張している¹⁴⁾。アドラー心理学では、「所属欲求」を人の基本的欲求と考え、最重要概念として「共同体感覚」を挙げている。「共同体感覚」とは、アドラー心理学の中でも理解することが困難であり、複雑で曖昧な概念(高坂 2011¹⁵⁾)とされているが、会沢(2014)は、「他者や世界に対する関心、所属感、貢献感、信頼感、安心感、協力、相互尊敬」の総体と述べ¹⁶⁾、古庄(2007)は、「共同社会の一員であるという所属の感覚であり、他の人と結びついているという共感的で情緒的な絆である」と述べている¹⁷⁾。赤坂(2014a)は、「共同体感覚を説明することが難しいだけに、それを育成する方法論も多様であるが、なかでももっとも有効なものとして挙げられるのがクラス会議である」と述べ、共同体感覚の育成におけるクラス会議の有効性を主張する¹⁸⁾。アドラー心理学の知見を活かした教育を提唱しているネルセンら(2000)は、クラス会議を「若者たちに人生のあらゆる領域-学校、職場、家庭、社会-で成功を収めるために必要不可欠なスキルと態度を教えるもの」と述べ、クラス会議は真の共同体感覚を身に付けるためのスキルを伸ばすことができ、最短の時間で最も効率よく子どもたちにライフスキルを教える方法だと主張する¹⁹⁾。また、古庄(2014)は、クラス会議について、「クラスの様々な問題や計画を自分たちで話し合い、自分たちの力で建設的に解決するものごとの決定に等しく責任を負う活動である」と述べ²⁰⁾、学級づくりに大きく貢献するものと支持する。さらに、会沢(2001)は、クラス会議とは、「アドラー心理学に基づいた学級経営の一技法」と述べ²¹⁾、その具体的な効果について、赤坂ら(2012)は、クラスにおける民主的な話し合いにより「学級や民主的な構造を変え、子どもの学級に対する欲求を満足させ所属感を持たせることが期待できる」と主張する²²⁾。これらのことから、クラス会議が、学級経営の充実を図る手立ての一つとして期待されていることがわかる。

しかしながら、赤坂(2014a)は、「実践している教師たちからは、子どもが『積極的になった』、『あたたかい雰囲気になった』、『協力的になった』などの学級集団の肯定的な変容が報告されている一方、それらは実践者の主観的な判断によるものが多く、客観的なものとは言い難い」と述べ、クラス会議に関する実践的なエビデンスは豊富にありながらも、実証的なエビデンスが乏しいことを指摘する²³⁾。このことから、実践的な考察ではなく、実証的な考察からクラス会議の有効性を述べる必要がある。したがって、クラス会議において、現在までの研究を概観し、研究の動向と課題を把握することには大きな意義があると考えられる。

1.3 研究の目的

本研究では、アドラー心理学におけるクラス会議研究の動向と課題について考察し、今後のクラス会議における研究の進展に向けて示唆を与えることを目的とする。

2 研究方法

国内の「クラス会議」に関する研究論文を抽出するために、Google Scholar (<https://scholar.google.co.jp/>)及び「CiNii」(国立情報研究所による論文情報ナビゲータ (<https://ci.nii.ac.jp/>))のフリーワード検索を用いて論文の収集を行った。検索に用いたキーワードは、「クラス会議」「クラスミーティング」であった。検索期間は、2019年4月から2019年5月までの、2カ月間で、論文検索及び分析は、第一筆者自ら行った。

本研究は、クラス会議研究の進展に向けて示唆を与えることを目的としているため、学会誌に掲載されている査読論文や大学・大学院が発行する紀要論文だけでなく、学会の発表論文集や大学の年報に掲載されたものも分析の対象とした。また、赤坂(2015)は、「筆者の研究室では、学校現場からの要請に基づく、学校支援活動において、いくつかの学校で、クラス会議プログラムを実施してきた。子どもたちの適応感の向上が報告されている。」と述べている²⁴⁾。そこで、未公刊ではあるが、『上越教育大学教職大学院 赤坂研究室教育実践論集』²⁵⁾及び『上越教育大学教職大学院 学校支援プロジェクト実践報告』²⁶⁾も分析の対象とした。よって、本研究では、前者を「公刊論文」、後者を「未公刊論文」として取り扱うことにした。

また、クラス会議プログラムには、さまざまな形態があり、固定された方法があるわけではない。日本でのクラス会議の実践は、ネルセンのクラス会議を参考にした森重(2010)²⁷⁾のクラス会議プログラム、また、クラス会議を日本の学校教育に応用できるように改良を加え、プログラム化した赤坂(2014b)²⁸⁾のクラス会議プログラムが中心であるが、他にもさまざまな場で行われているクラス会議プログラムがある(表1)。赤坂(2010)も、「クラス会議に典型があるわけではない」と述べており、クラス会議によって、学級に民主主義を確立することが重要であると主張する²⁹⁾。クラス会議には、決まった型があるわけではなく、そもそもアドラー心理学に基づいて作成されたものであるため、アドラー心理学の考え方が反映された特徴・共通点が存在していると考えられる。そこで、本研究では、アド

ラー心理学の基づいたクラス会議の要素を取り入れたものすべてを「クラス会議」として、研究の分析の対象とした。

表1 クラス会議プログラム一覧

著者	Jane・Nelsen (1997)	森重 (2010) 毎日15分	山崎・栗原 (2010)	赤坂 (2014) 週1回	伊澤・西山 (2016)
①雰囲気づくり	コンプリメントと感謝の言葉	ありがとうみつけ	コンプリメント	輪になる 話し合いの決まり いい気分・感謝・誉め言葉	輪になる 気持ちほぐしのゲーム ありがとう見つけ
②議題提案	前回の解決策について検討	議題提案	議題の提案	前回の振り返り 議題の提案	話し合いのテーマの確認
③話し合い	議事 a. 相手の話を聞き感情をわかち合う b. 自由に議論する c. 問題解決のための手助けをする	議題の話し合い ロールプレイ 話し合い 決定	解決策を出し合う 解決策を決定する	話し合い 決定	解決のアイデアを順番に出し合う テーマを出した人ができそうな方法を選ぶ(決定)
④決定 振り返り	これからの計画を立てる	決まったことの発表	次回の議長・初期の決定 ノートシートの順番決め 振り返り・改善の話し合い	決まったことの発表 司会・副司会・教師からの評価	テーマを出した人ができそうな方法を選ぶ(決定) 振り返り

(上記の先行研究を基に第一筆者が作成)

3 結果と考察

3.1 クラス会議研究における論文数の推移 (公刊論文22件)

上記の手順によって、クラス会議に関する学術論文を収集した結果、合計22件の論文が収集された。2010年から2019年までの論文数の推移状況を2年毎にまとめ、図1に示した。分析の結果、クラス会議研究は、2010年から研究が始まり、2014年を境に、増加傾向にあることがわかる。向後(2014)が、「アドラー心理学の学校教育における実践としてのクラス会議の効果も実証されつつある」と指摘していること³⁰⁾、また、現在、特別活動における学級経営の充実が図られていることが論文数の増加の要因として考えられる。

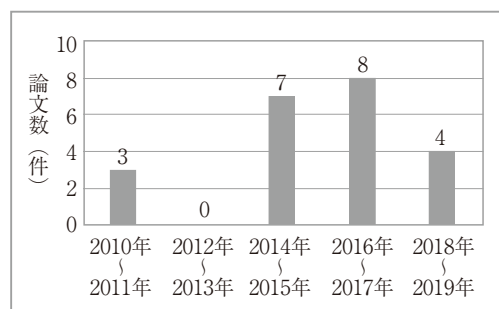


図1 クラス会議研究の推移

3.2 研究動向についての概観 (公刊論文において)

研究動向を整理するために、抽出された22件の分析対象論文において、それぞれの研究目的と結果から分類を行ったその結果、①学級満足度に関する研究、②クラス会議の効果・検証に関する研究、③共同体感覚の育成に関する研究、④問題解決能力の育成に関する研究、⑤その他の効果に関する研究の5つの研究枠組みに集約された。資料1に概要を示した。それぞれの枠組みごとに研究成果と課題を述べる。

3.2.1 学級満足度に関する研究

分析の結果、学級満足度に関する研究が9件と最も多かった。クラス会議研究における量的な調査方法について、河村(1998)が開発した、学級満足度尺度(Q-U)³¹⁾での調査が半数を占める。学級満足度尺度は、子どもの学級に対する満足感を図り、学級崩壊に至る可能性や学級集団の雰囲気をチェックできる尺度の一つとされている³²⁾。これには、承認得点と被害得点の2つの下位尺度があり、承認得点は、「自分の存在や行動が級友や教師から承認されている」と、子ども自身が感じている程度を表し、リレーションの確立と高い相関がある。また、被害得点は、「学校に不適応感を感じたり、級友からのいじめ・冷やかしなどを受けている」と子ども自身が感じている程度を表し、ルールの定着と深くかかわっている³³⁾。赤坂(2014b)は、クラス会議の実施により、学級満足度尺度の承認得点の上昇、被害得点の低下が有意に認められ、学校生活満足度が高まったことを報告している³⁴⁾。また多数の研究で、学級満足度の上昇が報告されている(保坂2011³⁵⁾、保坂2014³⁶⁾、高柳2014³⁷⁾、高山2016³⁸⁾、熊谷2016³⁹⁾、山岡・濱田2016⁴⁰⁾、吉内・赤坂2019⁴¹⁾)。伊住(2014)は、下位項目の「被害得点」の有意な低下が認められ、クラス会議には、ルールとリレーションを確立するという効果があることを示唆している⁴²⁾。これらの報告から、クラス

会議の実施によって、学級にルールとリレーションが定着し、学級満足度を高めることが考えられる。しかし、保坂（2011）の研究のように、SSTとSGE指導プログラムにクラス会議を併用して行うといった、他の変数との効果から学級満足度を高めた研究が多く（保坂 2011⁴³、川村 2011⁴⁴、保坂 2014⁴⁵、熊谷 2016⁴⁶、山岡・濱田 2016⁴⁷、吉内・赤坂 2019⁴⁸）、それぞれの実践が、子どもたちの学級満足度上昇に、どのような効果を与えたのか詳細に分析した研究は見当たらない。クラス会議が、学級満足度を高めた一要因であることは考えられるが、学級満足度の上昇には、クラス会議や他の変数以外の要因が影響している可能性が考えられる。

3. 2. 2 クラス会議プログラムの効果・検証に関する研究

分析の結果、クラス会議プログラムの効果に関する研究は、5件であった。赤坂（2014b）は、子どもたちの学級生活に対する満足度の上昇が期待される「クラス会議プログラム」の作成を報告している⁴⁹。伊澤・西山（2016）は、小学生を対象に、クラス会議、p4c（子どものための哲学）、サークルタイムの理論的枠組みと実践の整理から、試行版『クラス会議』を作成し、実施した結果、あたたかな学級風土を醸成していくことにつながる等々の取り組みの可能性を示唆している⁵⁰。また、伊澤（2016）は、学級活動の指導の重点化を行い、試行版『クラス会議』を活用した振り返り活動を行った。その結果、自己効力感、学級集団効力感尺度の数値が有意に上昇したことを報告している⁵¹。金山・堀内（2018）は、大学生のゼミ単位（7名）のクラス会議は、多様な在り方を相互に認め合いながら、どの子にも居場所がある学級集団を形成するのに貢献する可能性を報告している⁵²。また、山田（2017）は、保育園の年長児を対象に、アドラー心理学に基づくクラス会議を実施し、実践報告として、その教育的効果を報告している⁵³。以上から、保育園年長児から大学生まで、クラス会議プログラムの教育的効果が報告されている。しかし、公刊論文における、クラス会議研究は、大半（14件）が小学生を対象とした研究実践である。課題として、他の校種における研究実践の積み重ねや校種におけるクラス会議プログラムについて検討していく必要がある。

3. 2. 3 共同体感覚の育成に関する研究

分析の結果、共同体感覚の育成に関する研究は、5件であった。四日市市教育委員会教育支援課（2014）は、小学4年生を対象に、クラス会議を活用して、共同体感覚を育成することを目的とした。共同体感覚の「自己受容」「所属感」「信頼感」「貢献感」の4観点を質問項目とした「共同体感覚尺度」を作成し実施した結果、質問項目の4つの観点がいずれも向上したことから、クラス会議は共同体感覚を育成できる取り組みであることを示唆している。しかしながら、課題として、信頼性の高いアンケートづくりを行う必要性を述べている⁵⁴。山岡・濱田（2016）は、小学校中学年を対象にして、構成的グループエンカウンター（SGE）やクラス会議を行うことで、共同体感覚の高まりを検証することを目的とした。高坂（2014）が作成した「小学校版共同体感覚尺度」⁵⁵を用い、検証した結果、共同体感覚及び下位項目の「貢献感」「所属感・信頼感」が有意に上昇し、クラス会議の実践に一定の効果があったことを報告している⁵⁶。また、熊谷（2016）は、高校生を対象にして、クラス会議及び構成的グループエンカウンター（SGE）を短時間で継続して実施した結果、共同体感覚の高まりや学校生活満足度の向上を報告している⁵⁷。さらに、金山ら（2018）は、共同体感覚と集団凝集性に関する質問紙を用いて、大学におけるクラス会議の有用性と有効性について検討し、大学生の共同体感覚と集団凝集性の向上に及ぼす効果を報告している⁵⁸。また、金山・堀内（2018）は、大学のゼミ（7名）を対象に、クラス会議の効果を検証した結果、ゼミ単位のクラス会議は、共同体感覚の育成と共同体感覚を育み教育実践に関する自己効力感の向上に一定の効果あったことを報告している⁵⁹。以上から、クラス会議が共同体感覚の育成に効果があることが示唆されるが、論文件数が4件（小学校2件、高校1件、大学2件）であり、公刊論文からは、さらにクラス会議が共同体感覚の育成に効果があることを検証する実践研究の積み重ねが必要である。

3. 2. 4 問題解決能力の育成に関する研究

分析の結果、問題解決能力に関する研究は、2件であった。山崎・栗原（2010）は、香港インターナショナルスクールに通う3・4年生複式学級の児童を対象に、クラス会議で行われているコミュニケーションを、マズローの欲求階層説を用いて、質的に分析した。その結果、ポジティブな感情やコミュニケーションが喚起され階層的欲求を満たしていくこと、自己中心的な思考から問題解決志向へ向かわせる可能性があることを示唆している⁶⁰。また、大久保（2017）は、小学校5、6年生を対象に、2つの小学校で特別活動や朝の時間の時間にクラスミーティングを3度実施した。その結果、児童たちの学級への愛着や社会的な問題解決能力を高めることができたのではないかと示唆している⁶¹。しかし、山崎・栗原（前掲）が述べるように、クラス会議において、子どもの問題解決スキルがどのように発達していくかについての検討が不十分であり⁶²、クラス会議において問題解決を要求されている場面においてどの

ように問題解決スキルを発達させているのかを詳細に分析し、検討する必要がある。

3.2.5 その他の効果に関する研究

分析の結果、その他の効果に関する研究は、5件であった。高山（2016）は、クラス会議を導入したことによって、友達から認められているという、自己有用感を育む可能性を示唆している⁶³⁾。土方・赤坂（2016）は、中学校における部活動適応感を高めるために、クラス会議の要素を用いた「部活動会議」のプログラムを開発し、部活動適応感を高める上での課題である学年を超えた活動としてのプログラムの有効性を検討した。その結果、その効果を尺度や振り返り用紙から分析し、部活動適応感が高められることを示唆している⁶⁴⁾。元田ら（2017）は、クラスへの所属感を高めるための試みとして、クラス会議を実施し、検討した結果、ある程度の成果を得ることができたことを示唆している⁶⁵⁾。北野（2015）は、対人関係の向上を目指した取り組みとして、赤坂（2014）が提唱する「クラス会議プログラム」を導入し、その可能性を検討した。その結果、学級適応感尺度（井上・栗原 2010⁶⁶⁾）において、友人サポートが4ポイント向上し、クラス会議を実施することが友人サポートを向上させ、いわゆる学級崩壊を引き起こさないための手立てとなり得る可能性を示唆している⁶⁷⁾。村瀬・富田（2017）は、中学生を対象に、クラス会議を実施したことにより、協同学習に対する有効性の認識が向上するか検証した。その結果、聞き方スキル、要約スキルの指導を重点的に行うことで、学習者の協同学習に対する有効性の認識を向上させることができる可能性を示唆している⁶⁸⁾。

3.3 研究動向についての概観（未公開論文）①『上越教育大学教職大学院赤坂研究室 教育実践論集』

『上越教育大学赤坂研究室 教育実践論集』からは、合計8件の論文が収集された。研究の動向を整理するために、8件の分析対象論文において、それぞれ研究目的と結果から分類を行った。その結果、①クラス会議の効果・検証に関する研究、②学級満足度に関する研究、③その他の効果に関する研究の3つの研究枠組みに集約された。資料2に概要を示した。それぞれの枠組みごとに研究成果を述べる。

3.3.1 クラス会議プログラムの効果に関する研究

分析の結果、クラス会議プログラムの効果に関する研究は、3件であった。丸山（2013）は、小学校3年生を対象に、クラス会議と学級集団形成過程との関連を明らかにすることを目的とした。その結果、アセスにおいて、「生活満足感」が有意に上昇、クラス会議が、学級へ所属感を高めることに有効であることを報告している⁶⁹⁾。吉田（2017）は、中学校における共同体感覚を高める「中学校版クラス会議」の研究開発を行った。その結果、「中学校版クラス会議」が共同体感覚を高められるプログラムであること、またプログラムの継続により、学校適応感尺度の「教師サポート」「友人サポート」「向社会的スキル」が効果的に強化されることを示唆している⁷⁰⁾。松岡（2019）は、通常学級に在籍する発達障害児の学級適応感上昇のためのクラス会議の有用性について検討した。その結果、Q-Uにおいて、抽出児A児、B児ともに承認得点が上昇し、被侵害得点が下降したことを報告している。また、共同体感覚尺度において、A児の「貢献感」を中心に共同体感覚の上昇を報告し、「クラス会議」を行うことによって、特別な支援が必要だと考えられる児童の学級適応感が上昇することを示唆している⁷¹⁾。

3.3.2 学級満足度の効果に関する研究

分析の結果、学級満足度に関する研究は、2件であった。佐藤（2014）は、SFA（Solution Focused Approach：解決志向アプローチ）を加味したクラス会議と、児童の解決志向性や参加意欲、他者理解の向上に及ぼす影響を検討した。その結果、学級満足度尺度において、学校生活満足群が向上、侵害行為認知群及び学級生活不満足群が減少、学級生活意欲尺度では、「友達関係」が有意に上昇し、ソーシャルスキル尺度では、「配慮のスキル」「かかわりのスキル」がともに有意に上昇し、クラス会議にSFAを加味することで、児童の解決志向性や参加意欲、他者理解の向上に影響を及ぼし、学級改善を促進させる可能性を報告している⁷²⁾。藤島（2015）は、クラス会議における合意形成が、学級満足度に及ぼす影響を検討した。その結果、発話分析から、承認発言が増え、侵害発言が減り、合意形成が図られるようになったこと、また、学級満足度尺度において、承認得点が上昇し、被侵害得点が下降したことによる、学級満足度の上昇を報告している⁷³⁾。

3.3.3 その他の効果に関する研究

分析の結果、その他の効果に関する研究は、3件であった。江口（2012）は、ワールドカフェに基づくクラスカフェプログラムを中学生対象に話し合い活動の効果を検証した。その結果、共同体感覚尺度において、下位項目「貢

献感」が有意に上昇したこと、自治的集団の形成に効果があることを報告している⁷⁴⁾。畠山(2012)は、クラスcaféプログラムを実施した。その結果、学級機能尺度(松崎 2006⁷⁵⁾)において、下位項目「学級集団への所属感と有能感」、「集団凝集性」の得点が有意に上昇したこと、また、共同体感覚尺度において、下位項目「所属感・信頼感」、「貢献感」の得点が上昇したことにより、学級に対する所属感を高め、認められるという認識を与えるのに効果的であり、自治的集団へ変容するために有効であったことを報告している⁷⁶⁾。高柳(2013)は、クラスcafé、対話活動を行った結果、話し合い・かつどう社会性尺度(宮田 2011⁷⁷⁾)において、「総得点」及び下位項目「他者協調」、「自己実現」が有意に上昇し、自由記述において、「友達、学級への関心」に関する記述の増加が見られたことを報告している⁷⁸⁾。

3.4 研究動向についての概観(未公開論文)②『上越教育大学教職大学院 学校支援プロジェクト報告』

『上越教育大学教職大学院 学校支援プロジェクト報告』からは、合計19件の論文が収集された。19件の分析対象論文において、それぞれ研究目的、方法、結果から分類を行った。その結果、①クラス会議の効果・検証、②クラス会議と他の変数を併用して実施した効果・検証、に関する2つの研究枠組みに集約された。また、『上越教育大学教職大学院 学校支援プロジェクト報告』でのクラス会議に関する論文は、すべて対象が小学生であり、方法は、尺度を用いた量的な調査方法が中心である。分析の結果、43学級中28学級において、学級満足度尺度(河村 1998⁷¹⁾)を使用し、また、43学級中20学級において、小学校版共同体感覚尺度(橋口 2012⁷⁹⁾、高坂 2014⁸⁰⁾)が使用されている(重複あり)。以上のことから、学級満足度尺度、小学校版共同体感覚尺度の結果を中心に分析する。資料3に概要を示した。それぞれの枠組みごとに研究成果を述べる。

3.4.1 クラス会議の効果・検証

分析の結果、対象学級は、11件であった。扱われた尺度の結果、学級満足度尺度は11件であり、小学校版共同体感覚尺度は7件であった。

学級満足度尺度の結果、9件中(高橋ら 2013⁸¹⁾)は3学級:小1, 3, 6年全体で尺度を使用)6件で、有意差が見られた(高橋ら 2013⁸²⁾:小1, 3, 6年, 増田ら 2014⁸³⁾:小4年, 岡田ら 2016⁸⁴⁾:不明, 松岡ら 2018⁸⁵⁾:小4, 志田ら 2019⁸⁶⁾:小4, 2学級)。下位項目の「承認得点」「被侵害得点」ともに有意差が見られたのは2件であった(増田ら 2014⁸⁷⁾, 岡田 2016⁸⁸⁾)。下位項目「承認得点」に有意差が見られたのは1件であった(志田ら 2019⁸⁹⁾:小4, B組)。下位項目「被侵害得点」に有意差が出たのは3件であった(高橋ら 2013⁹⁰⁾, 松岡ら 2018⁹¹⁾, 志田ら 2019⁹²⁾:小4, A組)。

小学校版共同体感覚尺度の結果、7件中6件(橋口 前掲⁹³⁾1件, 高坂 前掲⁹⁴⁾5件)で有意な結果が見られた。総得点で有意差が見られたのは5件であった(増田ら 2014⁹⁵⁾(橋口):小4, 松岡ら 2018⁹⁶⁾(高坂):小3, 5, 6年, 志田ら 2019⁹⁷⁾(高坂):小4, 2学級)。下位項目である「貢献感」(高坂)に有意差が見られたのは、2件であった(志田 2019⁹⁸⁾:小4, 2学級)。

以上のことから、クラス会議は、学級満足度尺度において、数値に有意な変容が見られること、また、小学校版共同体感覚尺度において、「総得点」に有意な変容が見られ、特に下位項目「貢献感」の育成に有効であることが考えられる。

3.4.2 クラス会議と他の変数を併用して実施した効果・検証

(1) クラス会議と協同学習

分析の結果、対象学級は、16件であった。扱われた尺度の結果、学級満足度尺度は8件、小学校版共同体感覚尺度は9件、学級集団形成尺度(高嶺 1999⁹⁹⁾)は1件、協同作業認識尺度(長濱ら 2011¹⁰⁰⁾)は1件であった。

学級満足度尺度の結果、6件中(和田ら 2014¹⁰¹⁾)は3学級:小3, 4, 5年全体で尺度を使用)6件で有意な結果が見られた(和田ら 2014¹⁰²⁾, 荒巻ら 2015¹⁰³⁾:小4, 長崎ら 2015¹⁰⁴⁾:小2, 濱ら 2016¹⁰⁵⁾:不明, 松井ら 2016¹⁰⁶⁾:小2, 星野ら 2017¹⁰⁷⁾:小5)。下位項目「承認得点」「被侵害得点」がともに有意差が見られたのは2件であった(和田ら 2014¹⁰⁸⁾, 荒巻ら 2014¹⁰⁹⁾)。下位項目「承認得点」で有意差が見られたのは4件であった(長崎ら 2015¹¹⁰⁾, 濱ら 2016¹¹¹⁾, 松井ら 2016¹¹²⁾, 星野ら 2017¹¹³⁾)。

小学校版共同体感覚尺度の結果、9件中7件(橋口 前掲3件, 高坂 前掲4件)で有意な結果が見られた。総得点に有意差が見られたのは6件であった(今井ら 2017¹¹⁴⁾(高坂):小3, 2学級, 佐野ら 2019¹¹⁵⁾(高坂):小3, 4年, 長崎ら 2015¹¹⁶⁾(橋口):小5, 濱ら 2016¹¹⁷⁾(橋口):小5, 松井ら 2016¹¹⁸⁾(橋口):小6)。下位項目「貢献感」(高坂)に有意差が見られたのは3件であった(佐野ら 2019¹¹⁹⁾:小3, 4年, 今井ら 2017¹²⁰⁾:小3, A組)。下位

項目「所属感・信頼感」(高坂)に有意差が見られたのは1件であった(今井ら 2017¹²¹⁾:小3, B組)。下位項目「自己受容」(高坂)に有意差が見られたのは1件であった(今井ら 2017¹²²⁾:小3, A組)。下位項目「自己スキーマ」(橋口)に有意差が見られたのは2件であった(長崎ら 2015¹²³⁾, 濱ら 2016¹²⁴⁾)。下位項目「他者スキーマ」(橋口)に有意差が出たのは1件であった(松井ら 2016¹²⁵⁾)。学級集団尺度の結果, 1件中1件で下位項目「課題遂行」に有意差が見られた(長崎ら 2015¹²⁶⁾:小5)。協同作業認識尺度の結果, 1件中1件で下位項目「互惠懸念」で有意差が見られた(松井ら 2016¹²⁷⁾)。

以上のことから, クラス会議と協同学習を併用して実施することにより, 学級満足度尺度において, 数値に有意な変容が見られること, また, 小学校版共同体感覚尺度において, 「総得点」に有意な変容が見られ, 特に下位項目「貢献感」の育成に有効であることが考えられる。

(2) クラス会議とSST

分析の結果, クラス会議とSSTを扱った対象学級は2件であった。扱われた尺度の結果, 学級適応感尺度(栗原 2010¹²⁸⁾)の2件(佐藤ら 2013¹²⁹⁾)であり, 2件中1件で有意な結果が見られた(佐藤ら 2013¹³⁰⁾:小3, A学級)。下位項目「友人サポート」「向社会的スキル」に有意差が見られた。

(3) クラス会議と協同学習とSST (SGE, SSE)

分析の結果, 対象学級は14件であった。扱われた尺度の結果, 学級満足度尺度は9件, 小学校版共同体感覚尺度は4件, 学級適応感尺度(栗原 前掲¹³¹⁾)は2件であった。学級満足度尺度において, 6件中(北野ら 2011¹³²⁾:小6, 2学級全体で使用, 阿久津ら 2012¹³³⁾検証不可)6件で有意な結果が見られた(畠山ら 2011¹³⁴⁾:4学級, 北野ら 2011¹³⁵⁾, 阿部ら 2012¹³⁶⁾:小6)。下位項目「承認得点」「被害得点」とともに有意差が見られたのは1件であった(北野ら 2011¹³⁷⁾)。下位項目「承認得点」に有意差が見られたのは1件であった(阿部ら 2012¹³⁸⁾)。学級生活満足度の上昇が見られたのは4件であった(畠山ら 2011¹³⁹⁾)。

小学校版共同体感覚尺度において, 4件中4件で有意な結果が見られた(木下ら 2019¹⁴⁰⁾(高坂):小4, 5, 全4学級)。総得点が4件で有意な差が見られ, 下位項目「貢献感」に有意差が見られたのは3件であり, 下位項目「所属感・信頼感」に有意差が見られたのは2件であった。

学級適応感尺度において, 1件中1件(北野ら 2011¹⁴¹⁾:小6, 2学級合わせて使用)で有意な結果が見られた。下位項目「向社会的スキル」「非侵害的關係」に有意差が見られた。

以上のことから, クラス会議と協同学習とSSTを併用して実施することにより, 学級満足度尺度において数値に有意な変容が見られること, また, 小学校版共同体感覚尺度において, 「総得点」に有意な変容が見られ, 特に下位項目「貢献感」の育成に有効であることが考えられる。

4 全体考察と今後の展望

これまで, クラス会議研究における公刊論文(22件), 未公刊論文(27件)をそれぞれカテゴリーに分類して, 論文を概観してきた。本研究の目的は, アドラー心理学におけるクラス会議研究の動向と課題について考察し, 今後のクラス会議における研究の進展に向けて示唆を与えることである。本研究におけるクラス会議研究を考察・整理すると, 小学生を対象として, 学級満足度の上昇や共同体感覚の育成に関する実証的研究が蓄積されていることが示された。以下, 【対象・対象学年に関する効果】【学級満足度に関する効果】【共同体感覚に関する効果】の3点における成果と課題を述べ, 今後のクラス会議研究に求められる検討課題について述べる。

4.1 クラス会議に関する対象・対象学年に関する効果

本研究から, クラス会議に関する研究において対象は小学生が多いことが明らかとなった。公刊論文(22件)では16件, 未公刊論文(27件)では25件において, 対象が小学生であった。このことから, クラス会議の効果は, 小学生において確認することができる。また, 対象学年を見ていくと, 公刊論文では, 【小1:0件, 小2:1件, 小3:1件, 小4:1件, 小5:4件, 小6:5件】と, 小学校高学年が多い。また, 未公刊論文でも, 【小1:2件, 小2:3件, 小3:9件, 小4:11件, 小5:9件:小6:7件】と, 小学校中・高学年が多いことがわかる。これは, 低学年児童に質問紙調査を実施することの難しさが理由として考えられる。櫻井(2007)は, 子どもに対する質問紙調査の実施について, 低学年児童でも具体的な少数の事実に関する事項であれば正しく回答できるが, 自分

の状況や心理面に関して信頼性及び妥当性のある回答を得るのは難しいと指摘している¹⁴²⁾。

しかしながら、赤坂(2007)は、「クラス会議は、何年生でも実施できる」と述べ¹⁴³⁾、また、諸富、森重(2015)は、小学生と比べてコミュニケーションスキルが高い中学生や高校生に対してこそ、実践が期待されるという積極的意見を述べている¹⁴⁴⁾。したがって、小学校中高学年以外を対象に、クラス会議の効果に関する実証的研究の積み重ねからクラス会議の効果を述べる必要がある。

4.2 学級満足度に関する効果

本研究から、クラス会議が学級満足度の上昇に効果があることが示唆された。クラス会議における研究方法として、「学級満足度尺度(Q-U)」を用いた研究が多い。クラス会議と学級満足度の関係について研究した赤坂(2014b)は、小学校6年生を対象に、クラス会議の実施によって学級満足度が上昇する可能性を報告している¹⁴⁵⁾。本研究では、小学校3, 4, 5, 6年生において、クラス会議の実施によって学級満足度の上昇が多数報告されており、赤坂の見解と一致する。これらのことから、クラス会議が学級満足度の上昇に効果を及ぼす一要因であることが示唆された。一方、クラス会議が学級満足度に効果があったと断定することは、難しいと考える。クラス会議を独立変数とし、学級満足度上昇を従属変数とすると、教育活動では、多数の剰余変数が考えられる。すなわち、学級満足度上昇は、クラス会議以外の要因が考えられるということである。本研究から、クラス会議が学級満足度の上昇に効果を与える一要因であることは考えられるが、クラス会議が子どもたちにどのような効果を与えるのかを詳細に分析した研究は少ない。また、クラス会議と他の変数を用いて、学級満足度の上昇を考察した研究でも、それぞれの実践が子どもたちの変容にどのような効果を与えたのかも詳細に分析されていない。したがって、クラス会議が子どもたちにどのような効果を与えるのかに関して詳細に分析する必要がある。

4.3 共同体感覚に関する効果

本研究から、小学生において、クラス会議が共同体感覚の育成に効果があることが示唆された。公刊論文では、実践件数が4件(小学校2件、高校1件、大学2件)と少ない。一方、未公刊論文から考察すると、「小学校版共同体感覚尺度」を使用した実証的研究の蓄積から、小学生を対象にクラス会議が共同体感覚を高める手立てとして有効であることが考えられる。古庄(2009)は、「協同学習やクラス会議は子どもたちが相互尊敬に基づく平等なあり方を学び、共同体感覚を醸成させる機会である」と述べている¹⁴⁶⁾。未公刊論文ながらも、クラス会議の効果やクラス会議と協同学習を併用して実施した効果を扱った研究において、小学校版共同体感覚尺度における数値の有意な変容が多数報告されており、古庄の見解と一致する。これらのことから、クラス会議は共同体感覚の育成に効果を与える一要因であることが示唆された。一方、研究方法として使用した「小学校版共同体感覚尺度」について、疑問が残る。国内において、高坂(2011)による「青年版共同体感覚尺度」¹⁴⁷⁾、橋口(2012)による「小学校(中・高学年)用共同体感覚尺度」¹⁴⁸⁾、高坂(2014)による「小学生版共同体感覚尺度」¹⁴⁹⁾、橋口(2018)による「共同体感覚認知尺度」¹⁵⁰⁾など多数作成されており、特に「小学校版共同体感覚尺度」は確立されていない。未公刊論文では、高坂(2014)が開発した「小学生版共同体感覚尺度」が多く使用されているが、その下位項目である「自己受容」について、橋口(2018)は、「共同体感覚の条件から自己受容は除外して考える方が臨床的にも有用であると考えられる」と述べ¹⁵¹⁾、「自己受容」を共同体感覚の条件に含めるかどうか再考の余地があると指摘する。したがって、今後、共同体感覚尺度の再検討と確立が望まれる。

4.4 今後の展望

最後にクラス会議に関する研究の展望について3点述べる。

第一に、研究方法である。クラス会議研究における研究方法は、量的研究が中心であるが、上述の通り、今後は、クラス会議における子どもの効果を詳細に分析していく必要がある。例えば、ネルセンら(2000)は、クラス会議が学習者の社会的スキルや問題解決能力を高め、学級への適応を促す可能性があることを示唆している¹⁵²⁾。しかし、学級への適応に関しては、本研究で一定の効果が明らかとなったものの、社会的スキルや問題解決能力を高める効果について、科学的な検証を用いて検証を行った研究は少ないことがわかる。学級経営研究の方向性を述べた阿部(2019)は、「質問紙調査以外に他を組み合わせて研究の妥当性を高めていく必要がある」と述べている¹⁵³⁾。また、近年、「研究課題をより深くするために、量的研究および質的研究を組み合わせて使う」混合型研究(抱井・成田 2016¹⁵⁴⁾)が注目されている。クラス会議研究においては、質的な調査方法を用いた研究が乏しい。これらのことから、今後クラス会議研究は、量的な調査結果の妥当性を高めるために、発話・会話分析等、質的な調査方法を組み合わせて、混合型研究へと転換していく必要がある。

第二に、年齢・学級の実態に応じたクラス会議の効果の検証である。本研究では、小学校中・高学年における効果の可能性を示唆した。ただ、学級の実態に応じたクラス会議の効果の検証はできていない。また、他校種における効果の検証も報告されている（熊谷 2016¹⁵⁵、金山ら 2018¹⁵⁶など）。したがって、今後は、小学校低学年、小学校以外の他校種におけるクラス会議の効果に関する科学的根拠を示した研究の蓄積が望まれることと、学級や学校のタイプ別にクラス会議の効果を検証していく必要がある。

第三に、クラス会議プログラムの教育課程での位置づけである。クラス会議研究の実践的課題に、「継続指導」があげられている（高山 2016¹⁵⁷、山岡・濱田 2016¹⁵⁸）。クラス会議プログラムを開発した赤坂（2014a）も、クラス会議の最大の障壁は、時間の確保が難しいことを述べている¹⁵⁹。一方、学級の諸問題を話し合う活動について考察した古谷（2017）は、学級の諸問題を解決するための学級活動を捻出していけば、クラス会議はある程度定期的な実施できる可能性を述べている¹⁶⁰。また、小学校でのクラス会議プログラムの開発はなされているが、他校種でのクラス会議プログラムの効果の検証が少ない。熊谷ら（2018）は、中学校・高等学校の道徳教育の一つとして、ロングホームルームなどの時間を活用したクラス会議の実施試案を紹介し、中等教育における道徳教育の進め方の一つとして、提案・留意点などを指摘している¹⁶¹。また、中学校において、学級活動でなく、部活動の時間において、「部活動会議」として、効果を検証した研究もある（土方・赤坂 2018¹⁶²）。Johnson, Johnson, Holubec, Roy（1984）はグループの質による成長曲線を紹介し、協同学習において、始めは見せかけのグループとなり、成果が低くなるが、グループが成長するにつれて成果も高くなることを指摘している¹⁶³。クラス会議においても、同様のことが考えられる。今後、その校種及び学級の実態において、継続性が担保されたクラス会議プログラムの実践のもとに、クラス会議の効果を検証していく必要がある。

引用文献

- 1) 文部科学省：『小・中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』，東洋館出版社，2018
- 2) 文部科学省：『小・中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別活動編』，東洋館出版社，2018
- 3) 脇田哲郎：「学級経営の充実に資する小学校係活動の研究」，『福岡教育大学大学院教職実践専攻年報』，第9号，pp. 139-146，2019
- 4) 近藤憲一郎：「話し合い活動」押谷由夫・宮川八岐編『重要用語300の基礎知識12巻 道徳・特別活動重要語句300の基礎知識』，明治図書，pp. 202，2000
- 5) 宮橋小百合・中山真弘・須佐宏：「特別活動における学級会の取り組みの意義と展望」，『和歌山大学教職大学院紀要 学校教育実践研究』，No2，2007
- 6) 諸富祥彦編：『学級再生のコツ』，株式会社学習研究社，2000
- 7) 会沢信彦：「4 学級づくり・授業づくりにカウンセリングをこう生かす」，諸富祥彦編集代表，会沢信彦，赤坂真二編，『チャートでわかるカウンセリング・テクニックで高める「教師力」』，ぎょうせい，2011
- 8) ルドルフ・ドライカース，パール・キャッセル著，松田荘吉訳：『やる気を引き出す教師の技量』，一光社，1991
- 9) 赤坂真二：「アドラー心理学とクラス会議で子どもの市民性を育てる」，日本教育心理学会総会発表論文集，56，pp. 144-145，2014a
- 10) 諸富祥彦監修，森重裕二著：『クラス会議で学級は変わる！』，明治図書，2010
- 11) 赤坂真二：「アドラー心理学に基づくクラス会議プログラムの開発に関する研究」，『臨床教科教育学会誌』，第14巻第2号，pp. 1-12，2014b
- 12) 八長康晴：「学級の自治は子どもがつくる！」，『月刊学校教育相談』，ほんの森出版，29（13），pp. 8-11，2015
- 13) 久下亘：「クラス会議に出会った中学生たち」，『月刊学校教育相談』，ほんの森出版，29（13），pp. 12-15，2015
- 14) 赤坂真二：『先生のためのアドラー心理学』，ほんの森出版，2010
- 15) 高坂康雅：「共同体感覚尺度の作成」，教育心理学研究，59，pp. 88-99，2011
- 16) 会沢信彦：「学級経営とアドラー心理学」，会沢信彦・岩井俊憲編著，『今日から始める学級担任のためのアドラー心理学』，図書文化，pp. 25-32，2014
- 17) 古庄高：「アドラー心理学と学校教育」，『神戸女学院大学論集』，第54巻第2号，pp. 140-152，2007
- 18) 前掲9)
- 19) ジェーン・ネルセン，リン・ロット，H・ステファン・グレイン著，会沢信彦訳，『クラス会議で子どもが変わるアドラー心理学でポジティブ学級づくり』，コスモスライブラリー，2000。
- 20) 古庄高：「アドラー心理学とクラス会議で子どもの市民性を育てる」，日本教育心理学会総会発表論文集，56，pp. 144-145，2014
- 21) 会沢信彦（2001）：「『相互尊敬』『勇気づけ』の場となるクラス会議」，諸富祥彦編著『カウンセリングテクニックを活か

- した新しい生徒指導のコツ』, 学研研究社, 2001
- 22) 赤坂真二・水落芳明・桐生徹・神崎弘範:「学級の話し合い活動における今日的課題」, 『上越教育大学研究紀要』 31, pp. 1-7, 2012
- 23) 前掲9)
- 24) 赤坂真二:「アドラー心理学に基づくクラス会議の実践とその効果」, 日本教育心理学会総会発表論文集, 57 (0), 547, 2015
- 25) 上越教育大学教職大学院赤坂研究室『教育実践論集』:未公刊, 2012年~2019年
- 26) 上越教育大学教職大学院『学校支援プロジェクト報告』:未公刊, 平成21年度~平成30年
- 27) 前掲10)
- 28) 前掲11)
- 29) 前掲14)
- 30) 向後千春:「アドラー心理学とクラス会議で子どもの市民性を育てる」, 日本教育心理学会総会発表論文集, 56, pp. 144-145, 2014
- 31) 田上不二夫監修, 河村茂雄著:『たのしい学校生活を送るためのアンケートQ-U (心理検査)』, 図書文化, 1998
- 32) 前掲10)
- 33) 河村茂雄・藤村一夫・浅川早苗:『Q-U式学級づくり小学校高学年』, 図書文化, 2009
- 34) 前掲11)
- 35) 保坂康恵:「支持的基盤の醸成とあたたかい学級集団づくり」, 『教育実践研究』, 21, pp. 221-226, 2011
- 36) 保坂康恵:「全校体制による学級集団づくりを基盤とした学力向上への取り組み」, 『教育実践研究』, 24, pp. 307-312, 2014
- 37) 高柳麻里:「小グループを活かし, 一人一人が主体性をもって参加することを目指した話し合い活動」, 『教育実践研究』, 24, pp. 217-222, 2014
- 38) 高山史:「子どもが安心して自信をもって過ごせる学級を目指して」, 『教育実践研究』, 第26集, pp. 199-204, 2016
- 39) 熊谷圭二郎:「高校生に対する短時間で継続的なクラス会議とグループワークの実践研究」, 『学級経営心理学研究』, 5 (1), pp. 65-74, 2016
- 40) 山岡美和・濱田実智雄:「生徒指導を基盤とした学級経営の在り方についての研究」, 『研究紀要』, pp. 94-105, 2016
- 41) 吉内元子・赤坂真二:「クラス会議導入期における課題に対する手立ての検討:「ペアDEトーク」に着目して」, 『上越教育大学教職大学院研究紀要』, 16, pp. 25-33, 2019
- 42) 伊住継行:「クラス会議が学級のルールとリレーションの確立に与える影響について」, 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 552, 2014
- 43) 前掲35)
- 44) 川村孝樹:「協力的・自治的学級集団の育成-「クラス会議」を中心としたコミュニケーションの場づくりを通して」, 『教育実践研究』, 21, pp. 227-232, 2011
- 45) 前掲36)
- 46) 前掲39)
- 47) 前掲40)
- 48) 前掲41)
- 49) 前掲11)
- 50) 伊澤直美・西山久子:「子どもの自己指導能力を育成する方法に関する研究-試行版『クラス会議』の効果の検討-」, 『福岡教育大学大学院教職実践専攻年報』, 第5号, pp. 7-14, 2015
- 51) 伊澤直美:「自主的によりよい生活を送る子どもの育成を目指した学級活動(2)の試み」, 『福岡教育大学大学院教職実践専攻年報』, 第6号, pp. 111-118, 2016
- 52) 金山元春・堀内美咲:「教職課程で学ぶ特別支援教育・インクルーシブ教育と学級経営:ゼミ単位の「クラス会議」を通じた学び」, 『高知大学学術研究報告』, 67, pp. 13-23, 2018
- 53) 山田千理:「保育園年長児のクラス会議」, アドレリアン, 31 (1), pp. 24-27, 2017
- 54) 四日市市教育委員会教育支援課:「共同体感覚を育む『クラス会議』の活用に関する研究」四日市市教育委員会教育支援課, 研究調査報告, 393集, 2014
- 55) 高坂康雅:「小学生版共同体感覚尺度の作成」, 『心理学研究』, 84 (6), pp. 596-604, 2014
- 56) 前掲40)
- 57) 前掲39)
- 58) 金山元春・藤川恭輔・野村光平・金山左喜子:「大学生の共同体感覚と所属コースに対する集団凝集性を育むクラス会議実践」, 『学校カウンセリング研究』, 18, pp. 13-21, 2018
- 59) 前掲52)
- 60) 山崎茜・栗原慎二:「クラス会議が問題解決能力に及ぼす効果」, 『学校教育実践学研究』, 第16巻, pp. 37-44, 2010

- 61) 大久保泰成：「学級集団の問題解決力を育てる生徒指導の研究－選択理論の考え方を活かしたクラスミーティングを通して」、『福岡教育大学大学院教職実践専攻年報』, 7, pp. 75-82, 2017
- 62) 前掲60)
- 63) 前掲38)
- 64) 土方香樹・赤坂真二：「中学校における部活動適応感を高めるための部活動会議の効果の検証」、『上越教育大学教職大学院研究紀要』, 第5巻, pp. 23-32, 2018
- 65) 元田静・葛西里奈・小林尚美：「日本語学習者の所属感を高めるためのクラスづくり－クラス会議を中心とした実践的検討－」、『東海大学紀要 国際教育センター』, 第7号, pp. 59-79, 2017
- 66) 栗原慎二・井上弥：『アセスの使い方・活かし方 学級全体と児童生徒個人アセスメントソフト』, ほんの森出版, 2010
- 67) 北野稔：「対人関係の向上を目指した取り組みとしてのクラス会議の可能性」、『教育実践研究』, 第25集, pp. 181-186, 2015
- 68) 村瀬由加里・富田英司：「ふりかえりシートの導入によるクラス会議の話し合いの質改善の試み」, 日本教育心理学会総会発表論文集, 59, 621, 2017
- 69) 丸山悦子：「小学校中学年における学級集団の形成過程に関する研究－自治的集団をめざす学級集団づくり－」, 『上越教育大学教職大学院赤坂研究室 教育実践論集』, 第2号, 未公刊, 2013, (資料2, 4)
- 70) 吉田聡：「中学校における共同体感覚を高めるプログラムの研究開発－『中学校版クラス会議』が及ぼす影響－」, 『上越教育大学教職大学院赤坂研究室 教育実践論集』, 第6号, 未公刊, 2017, (資料2, 7)
- 71) 松岡遼：「通常学級に在籍する特別な支援が必要だと考えられる児童の学級適応感上昇のためのクラス会議の有用性」, 『上越教育大学教職大学院赤坂研究室 教育実践論集』, 第8号, 未公刊, 2019, (資料2, 8)
- 72) 佐藤将臣：「クラス会議が学級満足度に及ぼす影響－SFA (Solution Focused Approach) を加味したアプローチから－」, 『上越教育大学教職大学院赤坂研究室 教育実践論集』, 第3号, 未公刊, 2014, (資料2, 5)
- 73) 藤島謙太郎：「アドラー心理学に基づくクラス会議における合意形成に関する事例的研究」, 『上越教育大学教職大学院赤坂研究室 教育実践論集』, 第4号, 未公刊, 2015, (資料2, 6)
- 74) 江口彰子：「中学校学級活動における自治的活動による集団づくり－対話型話し合い活動の効果－」, 『上越教育大学教職大学院赤坂研究室 教育実践論集』, 創刊号, 未公刊, 2012, (資料2, 1)
- 75) 松崎学：「学級機能尺度の作成と3学期間の因子構造の変化」『山形大学教職・教育実践研究』, 1, pp. 29-38, 2006
- 76) 畠山明大：「自治的集団を目指した話し合い活動のあり方に関する研究－クラスcaféが及ぼす効果－」, 『上越教育大学教職大学院赤坂研究室 教育実践論集』, 創刊号, 未公刊, 2012, (資料2, 2)
- 77) 宮田延実：「社会性を育成するプログラムの効果についての検討－構造方程式モデリングによる指導前後の比較から－」, 『日本特別活動学会紀要』, 19, pp. 71-78, 2011
- 78) 高柳麻里：「集団生活に参画する態度を育む指導過程の在り方－小学校高学年の学級集団づくりを通して－」, 『上越教育大学教職大学院赤坂研究室 教育実践論集』, 第2号, 未公刊, 2013, (資料2, 3)
- 79) 橋口誠志郎：「小学校 (中・高学年) 用共同体感覚尺度の試み－中核信念に焦点をあてて－」, 『学校メンタルヘルス』, 15, No2, pp. 286-291, 2012
- 80) 前掲55)
- 81) 高橋克博・田中宏明・土屋雅朗・阿久津愛・赤坂真二：「かわりを通して, 学ぶ意欲を高め理解を深める児童の育成」, 『上越教育大学教職大学院 平成24年度 学校支援プロジェクト報告』, 未公刊, pp. 1-8, 2013, (資料3, 6)
- 82) 前掲81)
- 83) 増田正太郎・岩本真智子・佐藤正臣・高橋克博・赤坂真二：「チーム化を目指した学級集団づくり」, 『上越教育大学教職大学院 平成25年度 学校支援プロジェクト報告』, 未公刊, pp. 33-40, 2014, (資料3, 7)
- 84) 岡田順子・高橋健一・小坂篤史・宮崎大地・赤坂真二：「学級集団の機能向上過程における効果的な働きかけ」, 『上越教育大学教職大学院 平成27年度 学校支援プロジェクト報告』, 未公刊, pp. 25-32, 2016, (資料3, 11)
- 85) 松岡遼・砂土居裕貴・今井和歌子・吉内元子・島田克・赤坂真二：「自治的集団育成に向けた自他を認め合う人間関係づくり」, 『上越教育大学教職大学院 平成29年度 学校支援プロジェクト報告』, 未公刊, pp. 113-120, 2018, (資料3, 16)
- 86) 志田亮・檜野華鈴・渡邊信隆・荒谷大介・赤坂真二：「自治的集団を育成するための学級づくり～発達段階に応じた取り組みを通して～」, 『上越教育大学教職大学院 平成30年度 学校支援プロジェクト報告』, 未公刊, pp. 157-164, 2019, (資料3, 19)
- 87) 前掲83)
- 88) 前掲84)
- 89) 前掲86)
- 90) 前掲81)
- 91) 前掲85)
- 92) 前掲86)
- 93) 前掲79)

- 94) 前掲55)
- 95) 前掲83)
- 96) 前掲85)
- 97) 前掲86)
- 98) 前掲86)
- 99) 高旗正人：『教育実践の測定研究－授業づくり・学級づくりの評価－』，東洋館出版，1999
- 100) 長濱文与・安永悟・関田一彦・甲原定房：「協同作業認識尺度の開発」，『心理学研究』，57，(1)，pp. 24-37，2009
- 101) 和田望・陽弥生・田中宏明：「どの子どもも楽しく『わかる』『できる』確かな学びを身に付ける子どもの育成～良好な人間関係を基盤としたかかわりある授業づくり」，『上越教育大学教職大学院 平成25年度 学校支援プロジェクト報告』，未公開，pp. 1-8，2014，(資料3，8)
- 102) 前掲101)
- 103) 荒巻保彦・安倍加純・渡邊正博・増田正太郎・沼澤舞・藤島謙太郎・赤坂真二：「課題解決集団を目指した学級づくり」，『上越教育大学教職大学院 平成26年度 学校支援プロジェクト報告』，未公開，pp. 25-32，2015，(資料3，9)
- 104) 長崎祐嗣・樋熊沙穂・和田望・陽弥生・赤坂真二：「意見を交流し合い，共に高まり合う子どもの育成～教科・特別活動の両面から目指す課題解決集団～」，『上越教育大学教職大学院 平成26年度 学校支援プロジェクト報告』，未公開，pp. 1-8，2015，(資料3，10)
- 105) 濱弘子・橋本勝・宮尾香子・荒巻保彦・赤坂真二：「児童の自立を高める学級づくり～教師と子ども，子ども同士の信頼関係を基盤として～」，上越教育大学教職大学院「平成27年度 学校支援プロジェクト報告」，未公開，pp. 9-16，2016，(資料3，12)
- 106) 松井晃一・安倍加純・長崎祐嗣・樋熊沙穂・赤坂真二：「意見を交流し合い共に高まり合う子どもの育成」，『上越教育大学教職大学院 平成27年度 学校支援プロジェクト報告』，未公開，pp. 1-8，2016，(資料3，13)
- 107) 星野克・吉内元子・丸山浩生・濱弘子・宮尾香子・赤坂真二：「ルールとリレーションの確立に向けた学級集団づくり」，『上越教育大学教職大学院 平成28年度 学校支援プロジェクト報告』，未公開，pp. 1-8，2017，(資料3，15)
- 108) 前掲101)
- 109) 前掲103)
- 110) 前掲104)
- 111) 前掲105)
- 112) 前掲106)
- 113) 前掲107)
- 114) 今井和歌子・島田克・高橋健一・比留間文菜・宮崎大地・赤坂真二：「自治的集団育成過程における効果的な取り組み」，『上越教育大学教職大学院 平成28年度 学校支援プロジェクト報告』，未公開，pp. 17-24，2017，(資料3，14)
- 115) 佐野太洲・小田川知晶・砂土居裕貴・松岡達・赤坂真二：「仲間と協力しながら問題解決できる自治的集団づくり」，『上越教育大学教職大学院 平成30年度 学校支援プロジェクト報告』，未公開，pp. 165-172，2019，(資料3，18)
- 116) 前掲104)
- 117) 前掲105)
- 118) 前掲106)
- 119) 前掲115)
- 120) 前掲114)
- 121) 前掲114)
- 122) 前掲114)
- 123) 前掲104)
- 124) 前掲105)
- 125) 前掲106)
- 126) 前掲104)
- 127) 前掲106)
- 128) 前掲66)
- 129) 佐藤将臣・丸山悦子・赤坂真二：「温かい雰囲気とまとまりある学級づくり～システム転換で好循環を生みだす～」，『上越教育大学教職大学院 平成24年度 学校支援プロジェクト報告』，未公開，pp. 141-148，2013，(資料3，5)
- 130) 前掲129)
- 131) 前掲66)
- 132) 北野稔・岡一恵・石井麻美・近藤佳織・赤坂真二：「自治を目指した良好な人間関係づくり」，『上越教育大学教職大学院 平成22年度 学校支援プロジェクト報告』，未公開，pp. 195-202，2011，(資料3，1)
- 133) 阿久津愛・高柳麻里・丸山悦子・久下亘・高山彬夫・畠山明大・赤坂真二：「かかわりある授業づくりと学力向上－学級づくりを基に－」，『上越教育大学教職大学院 平成23年度 学校支援プロジェクト報告』，未公開，pp. 1-8，2012，(資料

- 3, 3)
- 134) 畠山明大・久下巨・荒川紗央里・井上高志・佐藤麻美・赤坂真二：「良好な人間関係を活かした学力向上」, 『上越教育大学教職大学院 平成22年度 学校支援プロジェクト報告』, 未公刊, pp. 203-210, 2001, (資料3, 2)
- 135) 前掲132)
- 136) 阿部琢郎・石井麻美・岡一恵・北野稔・赤坂真二：「相手の良さを認め、自分の思いを伝え合う学級を目指して」, 『上越教育大学教職大学院 平成23年度 学校支援プロジェクト報告』, 未公刊, pp. 9-16, 2012, (資料3, 4)
- 137) 前掲132)
- 138) 前掲136)
- 139) 前掲134)
- 140) 木下将志・川口雄・新井道崇・北村由実・赤坂真二：「認め合い、学び合う子の育成－対人技能の習得を軸とした、教師の一貫・継続した指導を通して－」, 『上越教育大学教職大学院 平成30年度 学校支援プロジェクト報告』, 未公刊, pp. 173-180, 2019, (資料3, 17)
- 141) 前掲132)
- 142) 櫻井茂雄：『子どものこころを測定するために 堀洋道（監修）櫻井茂雄・松井豊（編）心理測定尺度集Ⅳ』, pp. 399-403, サイエンス社, 2007
- 143) 赤坂真二：「クラス会議で望ましい人間関係を育む」, 『児童心理』, 61 (18), pp. 124-129, 2007
- 144) 諸富祥彦監修, 森重裕二著：『クラス会議パーフェクトガイド』, 明治図書, 2015
- 145) 前掲11)
- 146) 古庄高：「学校におけるアドラー心理学の新しい試み」, 『神戸女学院大学論集』, 55 (2) pp. 85-96, 2009
- 147) 前掲15)
- 148) 前掲79)
- 149) 前掲55)
- 150) 橋口誠志郎：「共同体感覚認知尺度の作成」, 『桜美林大学心理学研究』, Vol. 8, pp. 49-59, 2018
- 151) 前掲84)
- 152) 前掲19)
- 153) 阿部隆幸：「『学級経営』研究の整理と今後の方向性」, 『日本学級経営学会誌』, 1, pp. 5-8, 2019
- 154) 抱井尚子・成田慶一：『混合研究への誘い 質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ』, 遠見書房, 2016
- 155) 前掲39)
- 156) 前掲58)
- 157) 前掲38)
- 158) 前掲40)
- 159) 前掲9)
- 160) 古谷成司：「絆づくりに向けた学級活動に関する一考察」, 『授業実践開発研究』, 10, pp. 87-96, 2017
- 161) 熊谷圭二郎・荻間澤勇人：「中等教育における道徳教育としてのクラス会議のあり方について」, 『千葉科学大学紀要』 (11), pp. 83-90, 2018
- 162) 前掲64)
- 163) Johnson, D. W., Johnson, R. T., Holubec, E. J., Roy, P. 1984. Circles of learning. : Alexandria, VA : Association for Supervision and Curriculum Development. (石田裕久・梅原巳代子訳 『学習の輪－学び合いの協同学習入門－』, 二瓶社, 2010)

資料1 クラス会議公刊論文

No	分類	著者 発表年度	目的	調査対象者	研究方法	主な結果	主な課題
1	問題解決	山崎・栗原 (2010)	・クラス会議がポジティブな感情や社会的問題解決能力に与える効果を検討すること	HKISに通う3・4年生 複式学級生徒22名	発話分析	・クラスの中にポジティブな感情やコミュニケーションを喚起しそれが階層型欲求を満たしていくこと ・問題解決的思考に向かわせる可能性	・子どもの問題解決スキルがどのよう に発達していくかについて検討が不 十分 ・一事例の質的研究であり、比較検討 や量的な検討が不十分
2	学級満足度	保坂 (2011)	・SST、SGE統合プログラムの一連の実践にクラス会議を導入することで、学級満足度にどのように影響するかを検討すること	小学校6年生 計24名	学校生活満足度 尺度(以下Q-U) アンケート 振り返り記述	・学級満足度尺度における学級満足度の子どもも57%→92% ・クラス会議の定期的併用により学級肯定感が高まった ・自己有能感をもち、あたたかい学級集団づくりに効果	・個々の実践が子どもたちのどの変容 に効果的であったか詳細に分析する ことができなかった
3	学級満足度	川村 (2011)	・クラス会議を中心とした子ども同士のコミュニケーションの場の設定と工夫により、学級にまとまりのある親和的雰囲気ができるか検証	小学校5年生 計30名	Q-U アンケート 行動観察	・Q-U調査において、「侵害行為認群」と「学校生活不満足群」にわずかではあるが減少 ・コミュニケーションの質の向上、協力的態度の育成と学級の自治的雰囲気向上に役立った	・依然「非承認群」が多く、「かたのある学級集団」の様相 ・子どもたちの議論の質の向上を課題として研究を進みたい
4	効果・検証 学級満足度	赤坂(2014)	・クラス会議プログラムを作成することとクラス会議の実施と学校生活の満足度との関係について検証	小学校6年生 計32名 男子17名 女子15名	Q-U 振り返り用紙による評価 発話分析	・クラス会議の実施により学級満足度が上昇 ・試案プログラムの妥当性	・機能不全に陥っている学級や、新しく担任した学級での効果の検証
5	共同体感覚	四日市市 教育委員会 (2014)	・「クラス会議」を活用して、自分達の問題を話し合い解決する体験をすることで、共同体感覚を育成できることを明らかにすること	小学校4年生 計37名 男子16名 女子21名	質問紙調査 振り返り記述 発話分析	・質問紙調査の結果、共同体感覚の4観点(所属感、信頼感、貢献感、自己受容)において、値が概ね上昇 ・共同体感覚をクラス会議中の発話数で分析したところ、所属感や貢献感において発話少数群の値の上昇が顕著	・信頼性の高いアンケートづくり ・クラス会議を実施する回数や間隔、時間、または他学年や他校種等の年齢が異なる児童生徒を対象とした場合の効果や、年齢に応じた方法を 探る必要
6	学級満足度	伊住 (2014)	・クラス会議を実施することで、学級のルールやリレーションが確立するのを実践的に確かめること	小学校3年生 計27名	Q-U	・Q-U調査において、侵害行為認知群で有意に低くなり、学級雰囲気の上昇が有意傾向という結果 ・クラス会議には、人間関係上のルールと友達とのリレーションを確立するという効果がある	・一群事前事後テストデザインで行われており、内的妥当性が低い研究デザインで行われている点
7	学級満足度 その他	保坂 (2014)	・クラス会議、協同学習を全職員で取り組む「全校体制」を実施し、学校の中での信頼のネットワーク構造を構築し、学級生活満足度を高め、学力向上を見出すこと	H21年度～H24年度 当小学校全学級 児童	Q-U NRT学力検査	・Q-U調査において、H21年度と24年度を比較すると、学級生活満足度46%→85% ・NRT学力検査の各教科偏差値の数値上昇満足度が上昇 ・クラス会議と協同学習の併用によって学級満足度と学力向上に効果	・人間関係構築のためのプログラムや児童相互のかかわりある授業実践、またそれらを実践した後の事後検討を継続して行うシステムの維持が必要
8	学級満足度	高柳 (2014)	・児童の小グループによる話し合い活動を日常的に取り入れることで、自分たちの課題について解決しようとする意欲を高め、主体性をもって話し合い参加する集団を育てていくこと	小学校5年生 計31名 男子18名 女子13名	Q-U アンケート	・Q-U調査から、学級生活満足度が70.9%→74.2%に増加 ・日常的に友達と関わり、話し合う場が増えたことで、一人一人が認められる機会が増え、学級集団にも居心地の良さを与えていることが推察された	・侵害行為認知群が0%から9.7%(3人)に増加 ・話し合う量を増やすだけでなく、全員が気持ちよく話し合えるためのルールを決めて活動する必要性
9	その他	北野 (2015)	・対人関係の向上を目指した取り組みとしてのクラス会議の可能性について研究すること	小学校6年生 計33名	学校環境適応 尺度(以下アセス) 振り返り記述	・クラス会議が友人サポート形成に効果があるという可能性が示唆 ・クラス会議が対人関係能力の向上に効果的である可能性が高い	・教科の時間の確保などの理由で、人とのつながりを実感される時間が十分確保できない ・更なる対人適応の向上を目指したクラス会議の提案
10	効果・検証	伊澤・西山 (2015)	・『クラス会議』の試行として、週に1回、1単位時間の実践を行う。そのことにより、『クラス会議』の成果や課題を明らかにすることを目的とする	小学校5年生 計112名 男子63名 女子49名 3学級	Q-U 集団効力感尺度 アンケート インタビュー	・学級の雰囲気有意に高まったこと ・被侵害者が有意に好転したこと ・抽出見の承認得点が上がったこと ・『クラス会議』は温かな学級風土を醸成していくことにつながる等の取り組みに成果が見いだせることが示唆	・試行版『クラス会議』を継続的に試行し、学級の雰囲気、話し方、聞き方の成長を把握すると共に、学級活動②における活用の在り方を探る必要
11	効果・検証	伊澤 (2016)	・クラス会議を試行し、子どもの意見交流の効果を検討し、自主的によりよい生活をつくる子どもを育成する学級活動②の在り方を探り、学校の生徒指導上の課題を解決する教育活動の在り方について明らかにすること	A小学校(児童数563名)を実験校、A小学校と規模・地域性が類似した公立小学校2校(児童612名、児童数274名)	児童用一般性自己効力感尺度改訂版 学級集団効力感尺度 インタビュー	・第6学年における自己効力感尺度改訂版と学級集団効力感尺度の数値に有意な上昇が見られた ・子どもが自己目標に向かって継続して取り組む時に、クラス会議を活用して中間の振り返りを行い、新たな目標を設定することは、メタ認知を促すことに有効	・教育課程全体への位置づけ
12	学級満足度 その他	高山 (2016)	・クラス会議を中心として学級経営を進めることにより、子どもが教室に安心感をもち、自己有用感を高めていくことを明らかにしていくこと	小学校2年生 計24名 男子11名 女子13名	Q-U 行動観察	・Q-U調査において、学級生活不満足群が41.7%→20.8%に減少し、学校生活満足群が、29.2%から58.3%に上昇 ・クラス会議を中核に据えた学級指導は、子どもの安心感と自己有用感を高める有効な手立てであること	・クラス会議が強い抑止力になる ・クラス会議後の子どもの言動を注視し、クラス会議の負の影響を排除する支援をすること ・実践の継続性
13	共同体感覚	山岡・濱田 (2016)	・中学年を対象にして、学級の実態に応じた構成的グループエンカウンター(SGE)やクラス会議を行うことで、「共同体感覚」の高まりを検証していくこと	A小学校第4学年 計27名	Q-U 小学校版共同体 感覚尺度 児童用振り返り アンケート 行動観察	・小学校版共同体感覚尺度の総得点および、下位項目「貢献感」「所属感・信頼感」の得点有意に上昇 ・Q-Uの結果、学級生活満足度74%→88% ・振り返り記述から、友達に対して賞賛の記述増加	・継続指導の必要性 ・手法だけでなく、アドラー心理学の理論・理念を理解し、実践していくこと
14	学級満足度 共同体感覚	熊谷 (2016)	・クラス会議、または構成的グループエンカウンターを週に1回短い時間で継続的に実施することで、高校生の学校に対する意識や共同体感覚などにどのような影響を与えたのかを検証すること	都市部の公立高等学校 1年生A学級 男子17名 女子22名	Q-U高校生用 小学校版共同体 感覚尺度 振り返り記述 行動観察	・Q-U調査において、学校生活満足度が62.5%→74.4%に上昇、学校生活意欲尺度「学習意欲」「教師との関係」「進路意識」において、有意に上昇 ・共同体感覚尺度の下位項目「所属感・信頼感」に有意に上昇 ・クラス会議の実施によって、共同体感覚の高まりや学級生活満足度の向上	・クラス会議の実施によって、一部の人間関係において互いの距離や溝を強く感じさせる可能性 ・コンプリメントの在り方や質の向上 ・個々の生徒にどのような効果を与えるのかを検証する必要性 ・実証的な研究の必要性

15	その他	元田ら (2017)	・日本語学習者のクラスへの所属感を高める活動について、クラス会議を中心に詳述し、その実施可能性と課題について検討すること	日本語学習者11名 男性7名、女性4名 年齢：18歳～26歳	観察記録 アンケート インタビュー 文集による記述	・クラス会議は、共同体感覚や所属感を高める活動として有効である ・話し合いの場を複数回設けることで、問題があったときには、クラス全員による話し合いで解決策を考えるというクラスの文化を作ることができた	・クラス会議がどの程度学習者の所属感に効果を与えたかを明らかにすることができなかった
16	その他	村瀬・富田 (2017)	・クラス会議の実施により、「協同学習に対する有効性の認識」が向上するか検証する	中学3年生計37名 男子17名 女子20名	協同学習認識尺度 振り返りシート	・話し手の意見を理解しようとしながら聞いたり、多くの意見の類似点をまとめて要約する発言ができた学習者は、協同学習に対する有効性の認識が高くなったことが示唆された	・クラス会議の効果として想定していた協同学習の有効性の認識の向上は認められなかった
17	効果・検証	山田 (2017)	・保育園の年長児を対象に、アドラー心理学に基づくクラス会議を行う	年長児計20名	エピソード	・年長児の場合は、クラス会議の雰囲気を感じて、会議をしている場にみこんでいること、楽しい議題で意見を言える、聴いてももらえる体験をすることが大切 ・子どもたちだけでも、会議で決めている姿が見られた	・意見を言うとき、みんなが発言できる工夫
18	問題解決	大久保 (2017)	・特別活動の授業や朝の時間の時間を活用したクラスミーティングを取り入れ、個や集団の自己実現に関する社会的な問題の解決ができる児童の育成に取り組む、成果と課題を明らかにする	A小学校 第5学年計16名 B小学校 第6学年計28名	アンケート調査 振り返り記述	・アンケート調査の数値の上昇、「クラスの問題をみんなで解決することができると思いますか」の項目について、64%➡92% ・クラスミーティングを通して、学級への愛着や社会的問題解決力が高まった	・話し合い活動に時間がかかってしまうこと ・なかなか取り組むことができない児童に対しては、教育相談などを行い肯定的な行動ができるよう支援の必要性
19	その他	土方・赤坂 (2018)	・中学校において、クラス会議の要素を用いた話し合い活動（以下、部活動会議）の部活動適応感を高めることに対する効果を検証する	A県公立中学校 女子バレーボール部 計9名	部活動適応感アンケート 部活動アンケート 振り返りアンケート	・クラス会議の要素を用いた「部活動会議」が部活動適応感を高めるための手立てとして有効 ・部活動会議は、部活内における良好な関係の育成に有効であることが示唆	・部活動会議が学校生活にどのような影響を及ぼしているのか検討していくことが必要
20	共同体感覚	金山ら (2018)	・大学生の共同体感覚と集団凝集性の向上に及ぼすクラス会議の効果の検討	国立大学の教育学部 学生31名	共同体感覚尺度 集団凝集性尺度 感想文 エピソード	・共同体感覚尺度から、共同体感覚の総得点、下位項目「貢献感」「所属感・信頼感」「自己受容」のいずれの尺度得点が有意に上昇 ・集団凝集性得点も有意に上昇 ・感想文から、共同体感覚、集団凝集性が育まれている様子が読み取れる	・多様な学生を対象として、クラス会議のプロセスや効果に関する知見を積み重ねていく必要 ・統計処理の結果を十分に信頼するためには、分析対象者の拡大が求められている
21	効果・検証 共同体感覚	金山・堀内 (2018)	・教員志望学生に対して、多様な在り方を相互に認め合いながらどの子にも居場所がある学級集団の育成に貢献する「クラス会議」に関する実践的研究資料を得ること	国立大学の教育学部において心理学ゼミに所属する 2年生7名	共同体感覚尺度 実践効力感尺度 感想文	・効果量の値からすると、共同体感覚の育成と共同体感覚を育む教育実践に関する自己効力感の向上に一定の効果があった ・教職課程におけるクラス会議は、学級経営について、実践的に学ぶ機会として機能する	・実践を積み重ねながら、集団規模も含めて、大学におけるクラス会議についてさらに検討して行く必要
22	学級満足度	吉内・赤坂 (2019)	・「クラス会議」の導入期におけるコミュニケーションの量を確保するための手立てとしての「ペアDEトーク」の有効性を明らかにすること	小学校第6学年計27名 男子14名、女子13名	Q-U エピソード分析	・クラス会議とその導入期における「ペアDEトーク」を併用して実施した状況下でQ-U調査において、被侵害得点の下降、承認得点の上昇が確認 ・「ペアDEトーク」によって、クラス会議が円滑に進み、機能した	・クラス会議と「ペアDEトーク」の効果の範囲、また、双方の手立ての関係性について十分言及することができなかった ・児童の変容におけるこれらの手法以外の要因の影響があること

資料2 『上越教育大学教職大学院赤坂研究室 教育実践論集』

No	分類	著者 発表年度	目的	調査対象者	研究方法	主な結果	主な課題
1	その他	江口 (2012)	・ワールドカフェに基づくクラスcaféプログラムを中学校対象に実施し、自治的集団を形成するための話し合い活動の効果を検証	中学校	話し合いアンケート 共同体感覚尺度 振り返り用紙 授業記録	・共同体感覚尺度において、下位項目「貢献感」の上昇 ・話し合いアンケートにおいて平均点、「自己主張」「貢献感」「他者からの受容」「自己長所」が上昇 ・自治的集団の形成に効果	・定期的に実践できるプログラムの開発 ・特別活動における教師の指導の在り方
2	その他	畠山 (2012)	・クラスcaféによる話し合い活動を定常的に実施することで、学級集団の変容と、その効果を検証すること	小学校4学年計24名	学級機能尺度 小学校版共同体 感覚尺度 振り返り用紙 授業記録	・学級機能尺度において、「学級集団への所属感と有能感」、「集団凝集性」の得点の上昇 ・小学校版共同体感覚尺度において、下位項目「所属感・信頼感」、「貢献感」の得点上昇 ・学級に対する所属感を高め、認められているという認識を与えるのに有効 ・クラスcaféを行うと2カ月弱で学級に変化	・クラスcaféを実施する教師が、プログラムの内容や特徴を十分理解した上で実践を行うことが重要 ・さらなる実践による検証の必要性
3	その他	高柳 (2013)	・小学校高学年対象の参画する態度を育成するプログラムを作成、実施し、その効果を明らかにする	小学校5学年計28名	話し合い・かつどう社会性尺度 自由記述 行動観察	・話し合い・かつどう社会性尺度の合計得点において、5%水準で有意に上昇、下位項目「他者協調」「自己実現」の2因子で有意に上昇 ・自由記述の結果、話し合い活動開始後から「他者受容」から「友達、学級への関心」に関する記述の増加	・どの学級にも活用できるプログラムではない ・さらなる実践による検証
4	効果・検証	丸山 (2013)	・アドラー心理学に基づく学級活動の実践と学級集団形成過程との関連を明らかにすること	小学校3学年計33名 男子18名、女子15名	アセス 自由記述 振り返り用紙	・アセスにおいて、全因子が上昇傾向であり生活満足度が5%水準で上昇、教師サポート以外4因子が1%水準で有意に上昇、「学習適応感」「対人適応感」が高まり生活満足度が高まっていくこと ・学級への所属感を高めるために有効	・学級活動の内容の効果は示唆されたが、担任と子どもたちをつなぐ手立ての検討までには至らなかった ・学級活動の時間だけで学級集団づくりを行うのは限界がある
5	学級満足度	佐藤 (2014)	・SFAを加味したクラス会議が児童の解決志向性や参加意欲、他者理解の向上に及ぼす影響を検討	小学校4学年計35名 男子19名、女子16名	hyperQ-U 振り返り用紙 自由記述 行動観察	・学級生活満足度が66%➡77%へと向上、被侵害行為認知群及び学級生活不満足群が減少 ・学級生活意欲尺度では、「友達関係」が5%水準で有意に上昇 ・ソーシャルスキル尺度「かわり」「配慮」がともに5%水準で有意に上昇 ・振り返り用紙、すべての項目において、平均値の数値上昇	・モデル生成、学級への導入にさらなる検討 ・すべての児童生徒、学級にかなうアプローチモデルではない ・いまだ、侵害行為認知群、非承認群、学級生活不満足群に属している生徒がいる

6	学級満足度	藤島 (2015)	・クラス会議における合意形成が学級満足度に及ぼす影響を検討	小学校4学年計26名 男子16名, 女子10名	hyperQ-U 発話分析 アンケート インタビュー 行動観察	・承認発言は増え, 侵害発言が減り, 合意形成が図られるようになった ・Q-U調査において, 学級満足度尺度の下位項目「承認得点」が1%水準で有意に上昇, 「被侵害得点」が5%水準で有意に下降 ・いじめ問題解決の一助として有効である	・児童の変容について, 教師の働きかけが影響 ・合意形成を図っていくうえで, 他にどのような影響を及ぼし, どのような力が身につくのかを調査する必要
7	効果・検証	吉田 (2017)	・中学校において, 共同体感覚を高めるための中学校版クラス会議プログラムの効果を研究開発し, その効果を明らかにすること	中学校2学年A学級計37名 男子19名, 女子18名 中学校2学年B学級計36名 男子19名, 女子17名	共同体感覚尺度 アセス 振り返り用紙 行動観察	・A学級において, 共同体感覚尺度の総得点, 下位項目「貢献感」「自己受容」「所属・信頼感」のすべての項目で有意な差が見られた ・A学級において, アセスの「教師サポート」「友人サポート」「向社会的スキル」において有意な高まりがみられた	・B学級において, 有意な効果が見られなかった ・プログラムを運営する上で教師が①学ぶ意味の意味づけ②流れと課題達成の見通し③勇気づけによるフィードバックを適切に行うとともに, 活動全般にわたって生徒の活動を称賛する必要
8	効果・検証	松岡 (2019)	・通常学級に在籍する特別な支援が必要な児童の学級適応感上昇のための, クラス会議の有用性を明らかにすること	小学校4学年計26名 (抽出見A児, B児の2名)	小学校版共同体 感覚尺度 Q-U 振り返り用紙 行動観察	・Q-Uにおいて, 抽出見A児, B児ともに承認得点が上昇, 被侵害得点が下降 ・小学校版共同体感覚尺度において, A児は「貢献感」を中心に共同体感覚上昇を報告 ・「クラス会議」を行うことによって, 特別な支援が必要だと考えられる児童の学級適応感が上昇すること	・B児の変容が見られなかった ・クラス会議だけでなく, 認め合い活動や教え合える授業ふくりなど, 普段の学校生活から児童が認め合えるような活動を行う必要

資料3 『上越教育大学教職大学院 学校支援プロジェクト報告』(H21~H30)

No	著者 発表年度	目的	調査対象者	手立て	研究方法	主な結果	主な課題
1	北野ら (2011)	・基本的な規律, 児童同士の良好な人間関係を確立させ, 自治を育てること	小学校6学年計59名 2学級	クラス会議 ソーシャルスキル トレーニング (SST) グループワーク トレーニング (GWT)	学校環境適応感尺度 (以下アセス) 楽しい学校生活を送るためのアンケート (以下Q-U) 振り返り記述 行動観察	・アセスにおいて, 下位尺度「向社会的スキル」「被侵害の関係」が5%水準で有意に増加 ・Q-Uの結果, 学級満足度尺度の総得点において, 1%水準で有意増加, 下位尺度である「承認得点」では1%水準で有意に増加, 「被侵害得点」では, 5%水準で有意に減少 ・児童の感想によるカテゴリー分析において, クラス会議プログラムの実施により, 「学級への関心」の記述数の増加	・「絆タイム」プログラムがどの学年, 学級にも有効とは言い切れない ・今回のプログラムのどの活動がクラスの雰囲気や友人関係に影響を及ぼしたのか, 検証する必要
2	畠山ら (2011)	・「良好な人間関係を活かした学力向上」とし, 良好な人間関係のさらなる向上に加え, 学習意欲が向上する取り組みを行うこと	小学校 1.3.5.6 学年	クラス会議 全校SSE グループワーク トレーニング (GWT)	hyperQ-U クラス会議に関する アンケート インタビュー 行動観察	・Q-Uの結果, 学級生活満足群に上昇傾向(1年生:20%→100%, 3年生:58%→96%, 5年生:67%→74%, 6年生:67%→79%) ・クラス会議に関するアンケート, すべての質問項目で肯定的回答が有意に多い ・クラス会議が良好な人間関係や, 学級づくりに一定の効果を及ぼしていた可能性を示唆	・土台としての学習ルールがあること, 学習定着のための反復の必要性
3	阿久津ら (2012)	・学級活動での話し合いを中心とした学級づくりと並行して, 教科学習の中でも児童同士がかわり合う活動を積極的に取り入れることで, 学力向上を目指すこと	小学校 3.5.6学年	クラス会議 かわりのある授業 構成的グループ エンカウンター (SGE)	hyperQ-U かわりのある授業 への満足度調査 ワークテスト インタビュー 行動観察	・3つの学年において, Q-Uの結果, 学級生活満足群の割合が80%以上と高い数値を維持しており, ワークテストの結果も上昇 ・かわりのある授業への満足度調査において, 仲間に対する意識の向上が見られ, 児童の感想からも友達への尊敬の念や学級での協力に関する記述増加	・授業者による価値づけが必要
4	阿部ら (2012)	・人間関係作りプログラムと, 協同学習の考え方を基にした「かわりのある授業」を通して, 良好な人間関係を育成し, 認め合い, 伝え合う学級を育成	小学校6学年	クラス会議 ソーシャルスキル トレーニング (SST) グループワーク トレーニング (GWT)	hyperQ-U 「絆タイム」の振り返り 行動観察	・Q-Uの結果, 学級生活満足群が67%→77%, 下位尺度である「承認得点」が5%水準で有意に増加 ・振り返りアンケートにおいて, 「伝え合い」「認め合い」に関する結果が高い水準で推移 ・特別活動と教科学習に関連による継続的な働きかけによって, 相手の良さを認め, 自分の思いを伝えあう学級に近づいた	・被侵害得点について, 有意差が見られない
5	佐藤ら (2013)	・認め合い励まし合う人間関係を構築するとともに, 学級の凝集性を高めること	小学校3学年 2学級	協力・成功体験 ゲーム クラス会議	アセス 振り返り記述 振り返りアンケート 行動観察	・アセスにおいて, 下位尺度「向社会的スキル」と「友人サポート」が1%水準で有意に上昇 ・振り返り記述・アンケートの推移から, 「友達の話聞く意識をもちながら活動に参加していることがうかがえる」 ・学級に認め合う雰囲気を作り出し, 集団としてのまとまりを高めることが示唆	・学級に適切な行動が増えた一方, 行動の顕著な変容が見られない児童がいる
6	高橋ら (2013)	・クラス会議の質の向上	小学校 1.3.6学年	ペア発言のルール 指導 クラス会議	hyperQ-U 発話分析 行動観察	・Q-Uの結果, 1.3.6学年において, 「被侵害得点」が1%水準で有意に減少 ・クラス会議での, 発言人数, 発言数, うなずき・あいづちの回数の上昇 ・クラス会議において大切にしたい価値やスキル態度が形成されたことで, 児童相互が安心して発言し, 多様な意見を伝え合うことができる環境の形成	・人間関係構築のためのプログラムや他教科との関連の維持, 継続
7	増田ら (2014)	・共通の目標を協力して達成するという課題解決集団の育成(チーム化)を目指すことで, 学級に良好な関係性を構築すること	小学校4学年 1学級	「課題解決体験 の場づくり」 クラス会議	hyperQ-U 小学校版共同体感覚 尺度 行動観察 インタビュー	・Q-Uの結果, 学級生活満足度が66%→77%, 学級満足度尺度の下位尺度である「承認得点」が5%水準で有意に上昇, 「被侵害得点」が1%水準で有意に低下 ・ソーシャルスキル尺度「かわり」「配慮」が5%水準で有意に増加 ・小学校版共同体感覚尺度の結果, 5%水準で有意に上昇 ・クラス会議を中心とした課題解決体験が, 学級のチーム化を促し, 児童相互の良好な人間関係の構築を図る一要因として有効	・児童の協力的な態度や発言が学級の課題解決に役立っているという承認を与える場面を意図的に作る必要
8	和田ら (2014)	・クラス会議やSGE, SST導入継続によって, 学校全体で教科指導の基盤となる良好な人間関係の構築を図ること	小学校 3.4.5学年	クラス会議 かわりのある 授業	Q-U 行動観察 インタビュー	・Q-Uにおいて, 学校生活意欲尺度の結果, 「総合得点」と下位尺度「学級の雰囲気」が有意に上昇, 学級満足度尺度の下位項目「承認得点」が有意に上昇, 「被侵害得点」が有意に低下 ・学級全体にお互いを認め合う雰囲気が醸成されたものと推測	・承認得点の上昇と被侵害得点の減少は, クラス会議やSGE, SSTの効果と推測できるが, その他の要因も無視することができない

9	荒巻ら (2015)	・課題解決集団の育成	小学校4学年	クラス会議 かかわりのある 授業	hyperQ-U アセス 行動観察 インタビュー	・Q-Uの結果、学校生活満足度尺度の下位項目において、「承認得点」が5%水準で有意に上昇、「被侵害得点」が1%水準で有意に低下 ・児童相互の良好な人間関係の構築を図り、学級の課題解決力を養い、課題解決集団の育成が促進される一要因として有効であることが示唆	・子どもの長期的な成長を見通し一貫性のある指導の手立てを講じる必要
10	長崎ら (2015)	・かかわりのある授業と特別活動における話し合い活動に取り組み、学習課題や生活上の諸問題を児童同士の話し合いにおいて解決しようとする課題解決集団の育成を図ることである	小学校 2.5学年	クラス会議 かかわりのある 授業	Q-U 学習集団形成尺度 小学校版共同体感覚 尺度 行動観察 インタビュー	・2年生において、Q-Uの結果、学校生活満足度尺度の下位項目「承認得点」が有意傾向で上昇 ・5年生において、学習集団形成尺度の下位項目「課題遂行」が有意に上昇、小学校版共同体感覚尺度の総得点と下位項目「自己スキーマ」の数値が有意に上昇、特に「貢献感」に関する項目に有意差がある ・かかわりのある授業とクラス会議を行うことで、児童のかかわりが増え、学習への参加が高まったことが示唆	・かかわりの中での話し合いの質を高めるとともに今後は、かかわりの成果を個に返すための手立てを講じる必要性
11	岡田ら (2016)	・「教師と児童の信頼関係の形成」「ルールの確立」「リレーションの構築」を基にした学級集団の機能向上過程を想定し、それぞれの過程における効果的な働きかけを検討	小学校B学年	クラス会議	Q-U 行動観察 アンケート インタビュー	・Q-Uの結果、学校生活満足度尺度の下位項目において、「承認得点」が5%水準で有意に上昇、「被侵害得点」が1%水準で有意に低下 ・「ルール」の確立と「リレーションの構築」では、児童同士の認め合いと話し合い(クラス会議)による問題解決が有効	・自主的な言動を促す手立て
12	濱ら (2016)	・クラス会議における話し合いや、授業での問題解決を通して、子どもの自律の能力を高めていく学級集団づくり	小学校A学級	クラス会議 かかわりのある 授業	アセス hyperQ-U 小学校版共同体感覚 尺度 行動観察 インタビュー	・アセスの「友人サポート」「非侵害の関係」について有意差が見られ、「向社会的スキル」は有意傾向 ・Q-Uの結果、学級満足度尺度の下位項目「承認得点」が有意傾向 ・ソーシャルスキル尺度「かかわり」「配慮」において有意差が見られた ・小学校版共同体感覚尺度について、下位項目「自己スキーマ」の数値有意傾向 ・自立に向かう問題解決集団へと学級が成長するための手立てとしてクラス会議やかかわりのある授業が有効	・継続指導の必要性 ・手立ての省察
13	松井ら (2016)	・意見を交流し話し合い共高め合う子どもも育成	小学校 2.6学年	クラス会議 協同学習	Q-U(2.6年) 小学校版共同体感覚 尺度(6年) 協同作業認識尺度 (6年) 行動観察 インタビュー 振り返り	・2年生において、Q-Uの結果、学級満足度尺度の下位項目「承認得点」が5%水準で有意に上昇、被侵害得点は統計処理不可 ・6年生において、小学校版共同体感覚尺度の総得点と下位項目「他者スキーマ」の数値が有意に上昇、「自己スキーマ」の数値も有意傾向で上昇、協同作業認識尺度の下位項目「互惠懸念」が1%水準で有意に下降 ・クラス会議、協同学習が共同体感覚の高まり、学習意欲の向上、問題解決能力の育成に有効	・クラス会議が児童に与える効果
14	今井ら (2017)	・自治的集団育成過程における効果的な取り組みを明らかにすること	小学校3学年 A学級、B学級	クラス会議 協同学習	小学校版共同体感覚 尺度 自治的集団アンケート 行動観察 インタビュー 振り返り記述	・3学年全体において、小学校版共同体感覚尺度の結果、総得点及び、下位項目すべて有意に上昇、A学級では、総得点は有意傾向、下位項目「自己受容」で有意に上昇、B学級では、総得点は有意に上昇、下位項目「貢献感」「所属感・信頼感」において、有意に上昇 ・自治的集団尺度(アンケート)において、総得点が有意に上昇 ・クラス会議と協同学習の取り組みは、共同体感覚を高め、自治的集団の育成に有効	・子どもの実態は様々であり、すべての学級において有効であるとは言い難い
15	星野ら (2017)	・協同学習とクラス会議を同時に実施することが、どのような児童にとって、特に有効なのかルールとリレーションの確立の観点から明らかにすること	小学校5学年 A学級	クラス会議 協同学習	hyperQ-U クラス会議振り返り シート 行動観察 インタビュー	・Q-Uの結果、学級満足度尺度の下位項目「承認得点」において、下位層について、5%水準で有意に上昇 ・クラス会議、協同学習の取り組み、承認感が低い児童のリレーションを高めることに有効	・学級全体の被侵害得点の上昇 ・ルールとリレーションの確立に向かう過程について
16	松岡ら (2018)	・自他を認める人間関係作りの構築に向けて、担任が学級の雰囲気づくりを行う中で、クラス会議を定期的に行う効果を明らかにすること	小学校 3.4.5.6 学年	クラス会議 (全学年) 認め合い活動 「ハッピーレター」 (3.5.6年)	小学校版共同体感覚 尺度 hyperQ-U 行動観察 インタビュー 担任アンケート	・クラス会議のみ行った4年生は、小学校版共同体感覚尺度の総得点に変化はないが、学級満足度尺度の下位項目「被侵害得点」は有意傾向で上昇 ・3.5.6年生において、共同体感覚尺度の総得点は有意差 ・クラス会議は、特に共同体感覚と被侵害得点の低下に有効	・承認得点の上昇 ・日頃から関わり合い、認め合う活動を、クラス会議と併用して、継続して行く必要性
17	木下ら (2019)	・クラス会議、協同学習、SSTにおいて、人間関係づくりの根幹となる「価値」「スキル」「態度」を軸に、一貫・継続して取り組むことで、共同体感覚を高めること	小学校 4.5学年 各2学級	クラス会議 協同学習 SST 対人技能習得を 目指したルール 指導	小学校版共同体感覚 尺度 行動観察 振り返りシート	・小学校版共同体感覚尺度において、すべての学級で有意な差が生じた。特に、3学級において、下位項目「貢献感」が1%水準で有意差が見られた ・対人技能の習得を軸とし、クラス会議、協同学習、SSTを一貫、継続指導をすることは、共同体感覚を高めるために有効	・共同体感覚尺度の下位項目「自己受容」に有効性が認められなかった。
18	佐野ら (2019)	・協同学習、クラス会議の中の振り返りの場を設定した問題解決体験のサイクルを組織することによって、共同体感覚を高めること	小学校 2.3.4.5 学年	協同学習 クラス会議 振り返り	小学校版共同体感覚 尺度 行動観察 振り返りシート	・3.4年生において、小学校版共同体感覚尺度の総得点と下位項目「貢献感」が5%水準で有意に上昇 ・振り返りカードから、2.3.4年生において、「他者への関心がみられる」枚数の増加 ・問題解決体験のサイクルを通して、共同体感覚を高めることが、自治的集団作りに有効	・第2.5年生において、共同体感覚尺度に数値として有意な上昇が見られない。
19	志田ら (2019)	・自治的集団を育成するための学級づくり	小学校4学年 2学級	クラス会議	小学校版共同体感覚 尺度 hyperQ-U 行動観察 電話分析	・小学校版共同体感覚尺度において、A学級、B学級ともに、総得点に有意差が生じ、下位項目「貢献感」が5%水準で有意に上昇 ・Q-Uの結果、A学級では、下位項目「被侵害得点」において、5%水準で有意に低下、「承認得点」は下位層において、1%水準で有意に上昇、B学級では「承認得点」が1%水準で有意に上昇、「被侵害得点」は下位層において、5%水準で有意に低下	・上位層の児童のリレーションの上昇に有意な差が見られなかった

Trends of research and future prospects on the class meeting based on Adlerian psychology

Masashi KINOSHITA* · Shinji AKASAKA**

ABSTRACT

The purpose of this study was to organize the results and problems of research on class meetings based on Adlerian psychology and to give suggestions for future research on class meetings. As a result, it was suggested that class meetings are effective in raising class satisfaction and developing social interest in middle and upper grades of elementary school. Future tasks are as follows: (1)By integrating and analyzing both qualitative and quantitative research, the effects of class meetings have to be clarified in detail. (2)We need to accumulate demonstrative research at other kinds of schools. (3)It is necessary to continue the class meeting program.